静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　No.13 p.327～337 (2007)

〈論文〉

箱庭で「戦い」のプレイを繰り返した不登校男児の事例

The Process of Sandplay Therapy for a Boy with School Refusal who Repeated Play of "Fight"

五十嵐哲也*・小林朋子**
Tetsuya IGARASHI and Tomoko KOBAYASHI

1．はじめに

今もなお、児童・生徒の不登校に関する課題は山積している。平成17年度文部科学白書（文部科学省, 2006）によれば、平成16年度間に不登校であった小・中学生は12万3358人にのぼるとされる。報告数だけを取り上げれば減少傾向にあるものの、心理臨床場面においては、スクールカウンセリングをはじめとする教育領域はもちろんのこと、医療、福祉など複数の領域において解決のための努力が日々行われている。さらに、五十嵐・萩原（2004）によれば、登校しながらも学校に行きたくないという状態（不登校傾向）にある子どもも相当数おり、その心的構造は複雑性を極めることが指摘されている。

こうした不登校に対する心理臨床においては、様々な立場からのアプローチが試みられている。その中で、非言語的アプローチによる心理臨床は、言語的成熟が十分でない子どもに適しているとの考えから、子どもを対象とする多くの相談機関において実践されている。とりわけ箱庭療法に関しては、小中学生の多様な不登校の事例に適用した研究報告が散見される。例えば、谷山・西村（1999）は、抜毛症と不登校を主訴に来談した８歳男児に箱庭療法を適用し、箱庭上に攻撃性を表現した後に症状が改善した事例を報告している。また、芳地・青山・岡田（2003）は、心因性腹痛と不登校の状態にあった６歳女児について、箱庭療法を中心とする遊戯療法を行い、自己抑制的言動が減少して健全な母子分離が進み、腹痛消失とともに登校再開に至った様相を述べている。さらに杉浦・重村（1995）は、妹への攻撃行動がある不登校の10歳男児（帰国子女）に対する箱庭療法と母親面接について報告している。中学生に関する事例としては、田中（2003）が、スクールカウンセリングにおける女子の事例を報告し、女性性の受容と母親との内的繋がりの確認を通して登校を再開する様子と、その心理療法を通して学校内の教育相談システムの変化を促した様相を示している。

このように、不登校事例に対して箱庭療法を適用することについては、一定の評価がなされている。しかしながら、不登校臨床では現実生活の変化や改善も重視され、その状況に応じた対応が期待されるにもかかわらず、箱庭事例理解はメタファーの解釈による心的世界の理解が主であり、現実生活の展開過程が箱庭作品にどのように反映されているかに主眼を置いた報告は、極めて少ない。そこで本研究では、この点を踏まえ、箱庭事例に投映される「心的世界」と「現実生活」との両者の視点から解釈を行う可能性を明らかにしたい。事例は、不登校を主

＊国立精神・神経センター精神保健研究所　＊＊静岡大学教育学部附属教育実践総合センター

訴に来談した男子児童が、箱庭に対して、作品製作としてではなくプレイの一環として取り組んだものである。全31回の面接の中で、24回の箱庭によるプレイを行った。しかしながら、そこでは箱庭作品でしばしば認められる「戦い」の主題（河合, 1969）が表現されたほか、死と再生、再会なども見られた。また、箱庭と現実生活の接点として考えられる、カウンセラー（以下、Co）のまきこみ行動が頻繁に見受けられ、Coとの関係変化が箱庭に与える影響が観察された。さらに、現実生活の状況は母親面接も併行して展開し、その展開が箱庭における遊戯表現に反映されていると考えられた。なお、事例については、複数の事例を統合した記述にするなど、事例理解に問題が生じない程度に、詳細な部分に関して様々な改変を加えている。

2．事例の概要

（1）クライエント（以下、Cl）：男子、10歳、小学校４年生

（2）主訴：不登校

（3）家族：父親（以下、Faと略記。41歳、会社員）、母親（以下、Moと略記。39歳、パート）

（4）問題とその経過

幼い頃より問題がなく、大きな病気もしたことがない。学校では、リーダータイプではないものの、明るく人を笑わせることが好きな性格のため友達も多く、クラスの人気者である。成績も優秀で、あまり学校の勉強はしないが点数がよく、通信教育でまだ学校で習っていない範囲の勉強を軽々こなしている。これまで、学校に行きたがらなかったことは一度もなかった。

しかし、X年２学期が始まり、まもなく全く登校しなくなった。Moによれば、夏休み明けすぐの席替えで、隣の席がよくおしゃべりをする子になったことがきっかけとのことだった。Clはまじめな性格なので、授業をきちんと聞かないことが許せないとMoに訴えていたが、そうした不満を直接その子には言っていないようであった。また、この頃から、Clは次第にMoに対する言動が乱暴になり、自分が欲しい物はたとえ高額であっても「買え」と要求するなど、理不尽な主張を通そうとして、暴れたり脅したりすることが多くなった。不登校とともに、この家族への過剰な要求への対応にMo、Faともに疲れ果てている、とのことだった。

（5）来談経路

知人にClのことについて相談したところ、その知人の子どもが以前に当該機関で継続面接を受けていたことを知り、薦められたということで、自発的に来談した。これまで、自治体の教育相談機関、および医療機関に相談を行い、いずれも月１回のペースで継続中である。今回の来談は、これまでの機関では面接間隔が長いほか、面接の中でClが遊ぶだけであったことから、さらに相談機関を探したということだった。

（6）面接構造

２週間に１回、50分とした。母子ともに第一筆者が面接を担当し、分離面接を基本とした。

3．面接過程

（1）第1期「箱庭に取り組むための準備」（箱庭1～箱庭2）＜X年11月～X＋1年1月＞

インテークでは、利発そうな印象のClとMoが来談した。以上の概要について話した後、限界設定をした上でClをプレイに誘うと、「他に通っていたところでは、これはなかった」と言って、箱庭に興味を示した。「これ、やってみる？」と誘うと、「うん」と言って、様々なミニチュアを取り出しては砂の上にばら撒いた。そして、高いところから落としたり、ミニチュア同士を衝突させたりした。また、男性と女性のミニチュアを取り出し、「2人は仲良し。付き合っている。エッチなことする」と言って、ミニチュアの下半身を密着させる動きを示した（箱庭1）。その後、ボードゲームに興味を示し、「これも初めてやる」と言っていたが、ルール理解が早く、年齢不相応なほどに知的な印象を感じさせた。一方で、箱庭の統合性のない印象とのギャップに困惑させられる印象であった。プレイ後、面接システムの説明などを行うとともに、複数の相談機関へ同時に通うことの危険性を説明すると、「クリニックは継続するつもりはない、ここでの面接を始めたい」とのことで、継続面接の契約を行った。この間、Cl、Moともに饒舌であり、不安の高さが感じられた。

翌回では、Clは前回のボードゲームを選択してプレイを行ったが、Coへの気遣い行動を見せ、対人関係能力の高さが感じられた。また、トランプを使ったマジックを披露して自慢する素振りを見せ、Coの反応を試しているようであった。Moからは、Clからの過剰な要求は減少しているが、FaからMoの対応の甘さを指摘されるとの話がなされた。また、「MoとClは常に一緒にいるが、ClとしてはFaとの接触を求めているように思える。だが、FaはClと接しようせず、Moとしてはどうしたらよいかわからない」とのことだった。「継続中である自治体の教育相談機関でも、Faの問題が最優先と言われている。ただ、そこではClのプレイを担当者がメモするだけであり、Clとしては不満なようだ」ということだった。

3回目のセッションでは、MoとClの間で、面接時間の使い方をめぐってトラブルが発生した。Clは、「砂をやりたい」と訴えたが、Moも「今日は私が先に話したい」と主張し、結局Moの話が先になった。Moが日常生活に関するClへの対応に関する不安を話し、Clを入室させると、すぐに怒ってMoのことを殴り、泣き喚いてCoとの接触を拒んだ。そこで、#4で「時間の使い方について考えよう」と提案し、1回ごとにClが50分、Moが10分の回／Clが30分、Moが30分の回を作ることにするという合意に至った。その話し合いの後、Clは箱庭を選択し（箱庭2）、前回の箱庭同様、次々にミニチュアが持ち込まれた。ただし、今回は「にぎやかな町の中で恐竜や兵隊が暴れ、それを腕力の強いおばあさんが総理大臣になって治める」という、ユーモアにあふれたストーリーが展開した。また、その中で、工事の人が車を埋めるという作業もなされた。

（2）第2期「敵と仲間の出現」（箱庭3～箱庭6）＜X＋1年2月～X＋1年3月＞

箱庭3では、恐竜のミニチュアと怪物のミニチュアを戦わせるというストーリーが出現した。その戦いに、どんどん敵や味方が加わっていき、最後には一見弱々しそうに見える小さな猫が力を発揮して怪物チームが勝利するというもので、箱庭2と同様、力動関係の逆転現象を意識した構図が印象的であった。また、箱庭4では、これらの敵・味方関係が入り乱れたほか、敵・味方関係なく攻撃する存在が出現し、混乱した様相を呈した。箱庭5でも、同様に恐竜と怪物の戦いが繰り広げられたので、「2人はどうして戦っているの？」と問うと、「わからな

い」ということだった。しかし、直後に２人がキスをする場面が出現したので、「本当は仲良しなのかな？」と聞くと、２人は兄弟だったというストーリー展開を示した。箱庭６では、やはり恐竜と怪物が戦うが、マリア像が戦いに参戦。このことを機に、恐竜と怪物は手を組み、右半分を陣地としてマリア像をやっつけるストーリーを展開させた。

この時期、Moからは、当初、「ここでの様子に変化はあるのか」「ここの部屋の時計は見にくい」という批判的な言葉が認められた。また、自治体の教育相談機関での対応についても、「元気に見えるためか相手にされていない」「アドバイスもなく、あやふやな気持ちになる」と述べるなどの批判が見られた。しかしながら、Clの過剰な要求が消失するにつれて「教育相談機関の担当者に心を開けるようになってきた」と述べ、Mo自ら「同年代の子どもと触れ合う機会を持たせてあげたい」と不登校の子どもを対象にした塾を探すようになった。また、家ではMoに対して一緒に寝たいと述べるようになり、治療的退行が進んでいることが認められた。さらに、FaがMoの対応を批判するため、Moが困っていることも繰り返し述べられるようになった。

（３）第３期「仲間の確立」（箱庭７～箱庭10）＜X＋１年３月～X＋１年５月＞

この時期になると、恐竜と怪物は仲間として行動し、悪者であるマリア像を倒すというパターンでストーリーが展開するようになった。ストーリーとしては、マリア像が世界征服を企んでおり、それを阻止するために仲間で協力するというものである。そして、これ以後のストーリーは基本的にこの形を踏襲し、最後は必ず恐竜と怪物およびその仲間たちが勝利する、というパターンであった。仲間としては、箱庭１で登場したおばあさんに加え、首だけの人形、象、サイ、も出現し、これらが固定メンバーになった。また、攻撃の際にはロール・プレイング・ゲームの形式を取り入れ、攻撃方法をCoに選択させるという方法が用いられた（箱庭９以降）。その中で、スカートの中を覗く（箱庭７）といった性的な表現、首だけの人形が自らの血液を使って攻撃をする（箱庭８以降）というグロテスクな表現が認められるようにもなった。さらに、死んでしまった仲間が生き返る一方で、敵であるマリア像も復活する（箱庭８）というように、敵も仲間も容易にいなくなったり、出現したりする様相が示されるようになった。加えて、箱庭８からは、恐竜と怪物の「再会」からストーリーが展開されるようになったことも印象的であった。

このように、次第にCoとの関係性が深まる中で、Clの中にある攻撃性とその表出方法における葛藤、知的水準の高さに象徴される早熟さと同年代集団の中における違和感が明らかになるにつれ、Clは落ち着きを取り戻し、用事を見つけて放課後に担任に会いに登校するという出来事があった。しかし、その折に担任から登校を促され、家に帰ってから「行きたくなかった」と泣き喚き、Moが「休んでもいいが目標を」と述べて、家の手伝いや学習に関する約束をするという現実的課題の取り組みが認められた。同時に、日常生活でも、近所に住む低学年の子どもと知り合い、頻繁に家を行き来して遊ぶようになったという報告がなされ、楽しい生活を送っているということが認められた。

一方、Moとの面接では、教育相談機関での担当者から、Moの対応について責められるということがあり、それを機にしばらく中断し、後にとうとう担当者変更を申し出るということがあった。新しい担当者に対し、Moは良好な印象を持っており、「今度は落ち着いて通えそう」と述べるようになった。また、Faに対する怒りの感情が表出されるようになり、家でも

ClとともにFaを攻め立てるという事件が起こったことが報告された。そして、Clが生まれた直後からFaは疾患を患っており、現在も治療中である、しかしそのことについてClは一切知らないということが伝えられた。そのため、MoはClの問題をFaの問題と結び付けられて指摘されることが非常に多かったこと、ClのみならずFaにも気を遣って生活している状態であることが述べられた。そして、「休みの日には、キャッチボールをすることもある。ClとのこともFaなりに頑張ってくれているが大変なんだろうと思う。よくやってくれていると思う。あまり多くは求められない」と述べ、Faの努力を認めるようになった。加えて、ClがFaのことを慕っている様子も具体的に述べられるようになった。

（4）第4期「安定した基地からの出撃」（箱庭11～箱庭22）＜X＋1年6月～X＋1年11月＞

箱庭11からは、仲間たちが暮らすマンションが箱庭に置かれ、一緒に暮らしているという設定が加わった。そして、首だけの人形はアイドルとして働いている（箱庭11）などのキャラクター設定が加わり、朝食を買いに行く（箱庭12）、皆でTVを見る（箱庭14）、戦いに勝って給料が支給される（箱庭15）などの日常生活の行動が表現されるようになった。しかしながら、マリア像との戦いは続いており、時には大地震（箱庭11）や洪水（箱庭20）によって全ての登場人物が死にかけることや、死んでしまった仲間を埋める（箱庭18）といった出来事も起こった。また、首だけの人形によるグロテスクな攻撃方法も、依然として表現されていた。また、箱庭14では、戦いに参加しようとして役に立たなかった蛇を焼いて食べてしまうという表現、箱庭18では、倒れているサイの生肉を兵士が食べるという表現が、それぞれ見られた。

ところが、カブトムシという新たな仲間の出現（箱庭12）、皆で移動する際のガソリン給油の表現（箱庭11）、敵につかまった怪物を仲間で協力して助け出すストーリー（箱庭19）、壊れたブルドーザーを皆で直す作業（箱庭20）、怪物が事故にあったけれどもリハビリをしている様子（箱庭21）、仲間を「自己再生」の術で蘇らせる技（箱庭22）なども見られ、エネルギーの高まりや、新たな対処スキルの獲得が示唆された。実際、「午後は友達と遊ぶから」と午前中へ予約を変更するなど、箱庭よりも現実生活の方を優先できることが増えていった。

Moによれば、実際に様々な変化が起きているようであった。まず、クラスの友人からメッセージが届けられ、それに対して返事を返したという出来事があった。それをきっかけに、自発的に何人かの友人が家を訪ねてくることがあり、会えなかったものの嬉しそうだった、という報告がなされた。また、教育相談機関において小集団グループ活動が開始され、そこで高学年の児童と親しくなったこと、それに伴って今まで頻繁に遊んでいた近所の低学年の子とは遊ばなくなったこと、が認められた。

さらに、「野球チームに行ってみたい」と言い出して1人でボール投げの練習を始めたり、遠くから学校の運動会を見学して大声で応援したり、といった様子が見られるようになった。これに対し、Coは「担任の先生から、少し接触を取ってもらっては」とMoに提案したところ、「今の状態で落ち着いていて、先生も私も安心している気がしているが、このままでいいのかと内心では焦っている。最近は、私自身も先生と会う機会がない」と述べられた。そこで、Moより担任の先生へ連絡を取ってみては、と再度提案。すると、担任の先生も同様の気持ちであり、これからは頻繁に連絡を取り合おうという確認がなされた。そして、その後の家庭訪問の際、「クラスでマラソンをしていて、グラウンドを1週走るごとにシールを1個貼っているんだよ」とカードを渡されたことをきっかけに、Cl自身も近所を走ってシールを貼ってい

く活動を行い始めた。その様子から、担任の先生が「放課後、体育だけでもやりに来ない？」と誘い、Clも喜んで１週間に１度くらいのペースで通うようになった。

加えて、家庭でのClの様子も変化していた。まず、「食事の食べこぼしなどが増え、幼くなった気がする」とのことで、Clの年齢不相応だった印象から、徐々に年齢相応の子どもらしさが見られるようになってきたようであった。Mo自身も「考えてみると前は手のかからない子だった」と振り返り、Clが十分に自己表現できていなかったことに気づかされた、と述べるようになった。また、Moと２人で節約に励み、「出費ゼロの日」を作ろうとしている、という様子が報告された。当初、Clは、高額であっても自分がほしいと思った物品は手に入れないと気が済まない、という理不尽な主張をしていたので、MoにとってもCoにとっても、この変化は非常に大きなものと感じられた。さらに、Faに対しては「肩車して」と身体接触を要求するようになったほか、「もっとMoのことを大事にして」と紙に書いて伝えるという出来事があった。加えて、Moに対しては、「Faのことで機嫌が悪いんでしょ」「またFaのことで怒っている。間に立っているClは大変なんだよ。そういうことはFaに直接言ったら？」と述べるようになった。このClの変化によって、Moは自分とFaとの関係について考え始め、Mo自身も大きな変化を見せ始めた。

このMoの変化については、Faも来談するようになったことも関与していると考えられる。この時期のMo面接では、初めてFaとともに来談し、その後も時折ともに来談することが認められるようになったのである。ともに来談した折には、MoとFaで、長期休暇をClとどうやって過ごすか、などの検討がなされ、FaのことをMoが責める場面がしばしば見受けられた。しかし、Moのみの来談の際には、「Faはどう接していいかわからないんだと思う」「FaもClのこと考えている様子がある。Clの要求にも応えていることもある」「他の家でも父親はあまり育児には参加していない。ましてや、調子が万全ではないのだから、あまり求めても大変なのかな」と、Faの対応を評価する発言が認められるようになった。そして、「私がうまく振舞うことで、FaもClと楽しく遊べる」ことに気づき、Faの体調を気遣いながら、Clの要求を満たしていく方法を考え、実践していくようになった。さらに自らに対しても、「いつも家の手伝いなど、ClとFaに強制してやらせてきたが、たまに自分１人でやってみようと思ってやってみたところ、他の家事を知らない間に手伝ってくれていて、うれしかった。こういう関係がベストだと思う」と内省を深めていた。

（５）第５期「復興と永遠」（箱庭23～箱庭24）＜X＋１年12月～X＋２年３月＞

箱庭23では、いきなり川を作って、２本の橋を架ける作業を行い、様々なミニチュアを乱雑に置いた上で、「戦争が起きて、メチャクチャになった町を建て直す」という作業を行い始める。しかし、スムーズに事は運ばず、首だけの人形が皆のために用意した復興費用をマリア像に盗まれ、攻撃の配置などの初めての「作戦」を立ててから、皆でそれを取り戻すというストーリー展開を見せる。また、敵側にユニークなキャラクターの警察官が登場。さらに、首だけの人形は（やはり血液を使った）バリヤ攻撃という新しい技を編み出す。結局、箱庭の中には登場していない（棚の中にある）ミニチュアが攻撃を加え、敵を倒すという方法で戦いは勝利したが、この決着方法も、これまでには認められないものであった。

そして、この後、町が復興する様子を作り上げ、いつもの仲間が暮らしている様子を展開している際、Moが「待っている間に寝てしまって、もう時間かと思って慌ててしまって」とド

アをノックする。Moが「入っていいかな」とClに尋ね、入室すると、Clは調子が狂った様子、Moはその様子を察知して「恥ずかしいかな」と述べる。Clは時折Moの様子を見ながら、それまでとは違うストーリー展開を示す。この会話から、Coは、「Moにとっても、Clにとっても、『ClとCoとの箱庭』は特別なものであったんだな」と実感された。また、Moの入室は、箱庭でのプレイの世界に、Moを仲介役として現実世界とつながった感覚があるのではないか、と考えられた。実際、このセッションの最後、Moから「次回の予定の日は、Clのクラスの授業参観が入っているので、できれば時間をずらしてほしい」と述べ、ClとMoの間で学校の話題をしてから帰宅していった。

このことをきっかけに、ClとMoは、家庭でも学校の話題をするようになった。Moによれば、「今まで学校の話題はタブーだと思っていた。だけど、Clの方から『クラスの子と遊んでもいいよ』と言い出した。そして、『Moが学校のこと気遣って言わないのわかる、それはうれしいけど、そうさせている自分が嫌なんだ』と言っていた。この機会に、もっといろんな話ができるようになればいいと思う」とのことだった。そして、その後には、実際にクラスの子と家で遊ぶようになったことが報告されたほか、Clは「実は、ずっとMoに気を遣っていたんだ。Moの顔色を見て、Moが楽しくなるように気を遣っていた」と言うことを伝えた。これに対しMoは、「私と立場が逆転ですね、Clに支えられているんです。Faのことで精一杯で、Faとの間で感じていた苛立ちで、Clのことまでかまっていられなかった」と述べた。そして、「私自身もかまえないという寂しさがあったし、Clも寂しかったと思う」と、内省の言葉が認められた。そして、この箱庭23以降、Clは箱庭でプレイをすることをやめてしまった。時に、「チェスはないの？将棋は？」と言ってみたりして、これまで関心を示さなかった様々なゲームに取り組み始めるようになったのである。

しかし、この時期にCoの退任が決まり、Clとの面接が続けられないということになった。これに対し、ClもMoも、ショックな様子は見せるものの、「大丈夫です」と述べるにとどまった。引継ぎ等について、早急には決められないとのことで、２回にわたり検討した。この間、箱庭24を作成する。

箱庭24は、「永遠の森」に迷い込んだ恐竜と怪物およびその仲間が、怪物の恋人である女の子を救い出そうとするストーリーであった。途中、兵士たちに襲われたり、マリア像の企みで抜け出すために使用した飛行機を墜落させられたりする。この墜落をきっかけに、ストーリー性のある展開は終了し、飛行機やブルドーザー、神社、その他様々なものを箱庭の中に投入しては埋め尽くすという作業を、延々と繰り返すことに没頭するようになり、箱庭の中で別れの作業に取り組んでいる様子が感じられた。

結局、面接は継続せず、終結することになった。そして、現実生活でも起こる別れ（担任の変更、教育相談機関での友人の卒業など）の話をすることが多くなった。また、担任の先生から、さらに学校での課題に誘われ、喜んで夕方頃に登校して取り組む様子も語られた。最後の面接では、別れに直面化するのを避けるためか、「話は変わるけど」と述べて、ペットの話や家族の話などを饒舌に話し、「あ〜、疲れた。すごく話した後は疲れちゃって、次の日はぐったりするんだ」と述べた。さらに、「話に付き合ってくれてありがとう、さようなら」と言って終結となった。

4．考察

本事例の箱庭面接過程の流れについて、主要なテーマ、繰り返された事象などをTable 1にまとめた。

Clは、当初、知的水準の高さ（プレイの様子や現実状況）や早熟さ（箱庭の性的表現など）を背景に、同年齢集団との交流が極めて困難な状況の中、適応を試みて「文句も言わずに」「人を笑わせる」対処方略を用い、言葉を抑圧してきたと考えられる。またその状況は、MoがFaを心配して庇護する気持ちに由来する、Clの自由な感情表現が抑えられてきた事実にも起因していたと考えられる。しかしながら、自身と極めて異質なクラスメイトの存在を契機にそのバランスは崩れ、不登校に至ったものと推察される。箱庭を用いたプレイセラピー過程は、そうしたClが抱える様々な要因のために意識的に統制されてきた感情表現を、無意識に引き出す効果があったものと考えられる。繰り返されたグロテスク表現は、まさにその感情表現そのものであり、Clが抱えていた攻撃性と相俟って、行き過ぎた表現方法が箱庭の中で選択されて表出したのであろう。そして、その新たな自我との直面、それまでの自我との決別の統合過程は、河合（1969）が述べるように、「埋める」「死ぬ」「復活する」といった表現に象徴される、死と再生の主題に表現されていたものと考えられる。

ところで、具体的に面接過程を見てみると、本事例の箱庭において特徴的であるのは、第２期から最終箱庭に至るまでの間、全てにおいて「戦い」のプレイが繰り返されたことである。小学校６年生の不登校男児に対し、箱庭を用いた事例を報告した日浦・森（2002）は、作品における「対決」が親子関係の葛藤の様相を表す手がかりとなる、と述べている。本事例では、当初、敵と仲間の混乱が何度か生じたが、その後まもなくほぼ消失した。日浦・森（2002）の指摘を踏まえると、MoがClと十分に接することができずにいたという「さみしさ」のため、またFaの疾患について何も知らされていないという秘密の存在のため、Clには「甘えたいが甘えられない」葛藤状況が生じており、誰を信じてよいのかわからないという心情が箱庭に投映されたのではないかと考えられる。また、敵と仲間の混乱がほぼ消失した箱庭６を境に、陣地の形成や、Coのまきこみ行動の出現が認められることから、こうした心情はCoに対しても向けられていたものと推測され、Coの安定的態度によって徐々に敵と味方の区別がつけられるようになったものと考えられる。これは、再会の主題が、箱庭８～箱庭10で認められたことからも示唆される。すなわち、味方であるCoとまた会えた、という喜びが投映されていたのではないか。そして、Coと会うことが当たり前と感じられるようになった時から、再会の主題は消失したのではないか、と考えられる。この安定感については、第３期に至って陣地が「皆で住むマンション」という、まさに安定した場所になった時期とも符合する。

では、こうした心的世界が投映されていた箱庭作品の流れは、現実世界の転換過程とどのように対応していたのであろうか。特徴的であるのは、第４期において、新たな仲間の出現やエネルギー補給、修復や再生の作業が箱庭で展開されるに至った際、Clがそれまで「文句も言わずに」我慢してきたことをMoとFaに対して直接的に言語化したことである。このようなCl自身の変化を基盤とした親子関係の変化過程が、本事例では的確に箱庭表現として表出していた、と指摘することが出来る。また、それだけではなく、第２期において、それまで敵であった恐竜と怪物が仲間になるに至り、それまでMoがCoに対して向けていた攻撃性（「Coにも非難されるのではないか」という防衛）が認められなくなった。また第３期に、箱庭の中で仲間が増えて固定的になるに至っては、MoがそれまでCoに語らなかったFaの疾患について明ら

Table 1　箱庭面接過程の流れ

		戦いの構図	敵と仲間の混乱	陣地	死と再生	再会	グロテスク表現	日常生活表現	Coのまきこみ
第1期	箱庭1	×	×	×	×	×	×	×	×
	箱庭2	×	×	×	×	×	×	×	×
第2期	箱庭3	恐竜VS怪物	×	×	×	×	×	×	×
	箱庭4	恐竜VS怪物	○	×	×	×	×	×	×
	箱庭5	恐竜VS怪物	×	×	×	×	×	×	×
	箱庭6	恐竜・怪物 VSマリア像	○	○	×	×	×	×	×
第3期	箱庭7	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	×	×	×	×	×	×
	箱庭8	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	○	仲間と敵が復活する	○	血液で攻撃	×	×
	箱庭9	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	○	×	○	血液で攻撃	×	○
	箱庭10	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	×	×	○	血液で攻撃	×	○
第4期	箱庭11	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	○	大地震で仲間が死にかける	×	血液で攻撃	○	×
	箱庭12	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	○	×	×	血液で攻撃	○	○
	箱庭13	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	○	×	×	血液で攻撃	×	○
	箱庭14	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	○	○	蛇の死	×	血液で攻撃 蛇を食べる	○	×
	箱庭15	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	○	○	×	×	血液で攻撃	○	×
	箱庭16	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	○	×	×	血液で攻撃	×	○
	箱庭17	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	○	×	×	血液で攻撃	○	○
	箱庭18	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	○	死んだ仲間を埋める	×	血液で攻撃 生肉食べる	×	○
	箱庭19	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	○	×	×	血液で攻撃	×	○
	箱庭20	恐竜・怪物・仲間 VSマリア像	×	○	洪水で仲間が死にかける	×	血液で攻撃	×	×

		戦いの構図	敵と仲間の混乱	陣地	死と再生	再会	グロテスク表現	日常生活表現	Coのまきこみ
第4期（続き）	箱庭21	恐竜・怪物・仲間VSマリア像	×	○	怪物がリハビリ	×	血液で攻撃	○	×
	箱庭22	恐竜・怪物・仲間VSマリア像	×	○	自己再生の術	×	血液で攻撃	○	×
第5期	箱庭23	恐竜・怪物・仲間VSマリア像	×	○	×	×	血液で攻撃	○	×
	箱庭24	恐竜・怪物・仲間VSマリア像	×	×	ミニチュアを埋める	×	×	×	×

かにしたほか、それまで一方的に非難していたFaのClに対する対応を認める発言が生じてきた。さらに、教育相談機関の担当者の変更を申し出、Moがようやく落ち着いて通えるようになったのも同時期であった。このように、Mo側の変化やMoを取り巻く援助資源の存在さえも、Clの箱庭には表現されていた可能性がある。

加えて、Cl自身の生活に目を転じると、さらにいくつかの点が指摘できる。第３期に箱庭の中で仲間が確立した際、実際にClには低学年の子どもと知り合うという出来事が起こっていた。そして箱庭で新たな仲間が出現した第４期では、現実にクラスメイトが家を訪ねてくるという出来事が起こり、Cl自ら「野球チームに入りたい」という発言が認められた。また教育相談機関においては小集団グループ活動が開始され、新たな高学年の友人を獲得し、それまでの近所の子どもとの遊びから変化した様子が見られた。このように、箱庭における仲間の出現は、Clの現実世界における仲間の出現を示していた可能性が高く、したがって「敵」「味方」を必要とした「戦い」の箱庭表現は、Clにとって不可欠なものであったと示唆される。また、こうした状況に合わせて、Clは徐々に部分的登校を再開し始めるが、その時期は第４期に、箱庭の中で日常生活表現を始めた頃に符合する。Clは箱庭の中で、Clにとっての日常生活＝学校への復帰の準備を模擬的に行っていたのではないか、と示唆される。これが端的に表現されているのが、第５期の箱庭23である。箱庭23は復興がテーマであるほか、しばしば統合の象徴とされる（河合, 1969）トリックスター的な役割を担った「警察官」も登場した。また、川に橋を架けるという作業を行ったわけだが、偶然にMoが初めて箱庭場面に立ち会うという出来事が生じた。加えて、そこでは箱庭の中で新たな攻撃方法が示され、新たな対処スキルの獲得が示唆された。そして、このセッションを契機にClとMoは率直に学校について会話をするようになり、以後、箱庭をプレイとして選択することはなくなって、学校への部分的登校が拡大した。こうした自我の統合と考えられる状況と、現実的な登校行動の拡大、さらに箱庭作品の中断は、相互に関連しあって表出されたものであろうと推測される。

箱庭24に関しては、「永遠の森」の表現に象徴されるように、Coとの別れを強く意識した作品であると考えられる。したがって、Coの退任という外的事実が生じなければ、この箱庭作品は出現しなかった可能性もある。しかしながら、いずれにせよ、Coの退任というClにとっての現実課題と、それに伴う別れの寂しさという心的世界が双方ともに表現されたものであろう。このように、いずれの箱庭においても、その解釈にあたっては、メタファーの解釈を基にした心的世界の理解の視点と、現実世界の状況との関連性を見て取る視点の双方が不可欠であ

り、面接過程の展開に寄与したことが指摘できる。

5．おわりに

本研究では、箱庭をプレイの一環として繰り返し用い、その中で「戦い」のプレイを繰り返し表現した不登校男児の事例を取り上げた。そこに表現される主題や繰り返される事象は、Clの心的世界と現実状況の双方を的確に示すものであった。今後は、ここで示された視点が他の臨床的課題にも普遍的なものであるのか、また発達的変化は認められるのかについて、検討を重ねる必要がある。

引用文献

日浦美緒・森範行　2002　不登校児の箱庭作品にみられる対決のテーマ　北海道教育大学教育実践総合センター紀要, 3, 235-242.

芳地貴子・青山富貴子・岡田弘司　2003　心因性腹痛、不登校を呈した６歳女児に対する箱庭療法　心身医学, 43, 387.

五十嵐哲也・萩原久子　2004　中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連　教育心理学研究, 52, 264-276.

河合隼雄　1969　箱庭療法入門　誠信書房

文部科学省　2006　平成17年度文部科学白書　国立印刷局

杉浦京子・重村朋子　1995　妹への攻撃を伴った不登校児の箱庭療法の過程と母親面接　日本医科大学基礎科学紀要, 19, 33-53.

田中慶江　2003　心因性頻尿から不登校に至った中学生のスクールカウンセリング　心理臨床学研究, 21, 329-340.

谷山純子・西村良二　1999　抜毛症と不登校を呈した８歳男児に対する箱庭を使った遊戯療法　児童青年精神医学とその近接領域, 40, 277-285.